



No. 56

令和4年3月18日

発行 多治見市教育研究所

URL: <http://school.city.tajimi.lg.jp/kyoiku/>
 本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でも
 ご覧いただけます。

巻頭言

指導の個別化・学習の個性化？

多治見市立多治見中学校 校長 田中慎一郎

「指導の個別化」「学習の個性化」、私にとっては随分と懐かしく思い出深い言葉です。

令和3年に中教審から、実現すべき「令和の日本型教育」の姿の1つとして「個別最適な学び」が挙げられ、さらに「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理され示されました。そこで初めてこの2つの言葉を目にした方もあるかと思います。私がこの言葉に出会ったのは、平成14年～16年にかけて、南ヶ丘中学校で「学力向上フロンティア事業」の指定を受けた時のことでした。指定事業のねらいは、個に応じたきめ細かな指導の充実。指定した県教委は、主に数学と英語の少人数指導の在り方を深める研究をして欲しかったようですが、学校としてはすべての教科において個に応じた指導をどう扱うかということについて取り組みたいという思いから、研究の柱に「指導の個別化」と「学習の個性化」の考え方を取り入れました。この考え方については、当時上智大学の教授であった加藤幸次氏の著書から自分なりに学び、職員へ説明をしたものの、よくわからないという声をいただいた苦い思い出もあります。なるべく単純化して、視覚的に理解してもらえるように工夫し、ようやく少しずつわかってもらえるようになったことを記憶しています。

その当時の資料を用いて説明すると、次のようになるかと思います。

「教育の内容」、「教育の方法」をそれぞれ「教

		教育の方法	
		教師	子ども
教育の内容	教師	A	B
	子ども	C	D

師が決める」、「子どもが決める」で区切ると、左下の図のような、A・B・C・Dの4つのセルができます。

A領域は、教育の内容も教育の方法も教師が決める従来の一斉的な指導ということになります。

「指導の個別化」とは、個人差という学習速度、習熟度、学習スタイルなどに応じようとする形態であり、図の領域でいえば、教育の方法や教育内容の一部を子どもが決めるB、D領域を指すことになります。

「学習の個性化」とは、個人差という主に興味・関心、生活経験などに応じようとする形態であり、図の領域でいえば、教育の内容や教育の方法の一部を子どもが決めるC、D領域を指すことになります。

子どもは一人一人異なる存在です。そして個の違いに応じてより適した指導のあり方を考えると、個別化や個性化の土台はあります。確実に定着させなければならない基礎・基本を、全ての子どもたちに身に付けさせることに重点があるのが「指導の個別化」。身に付けた基礎・基本を土台としながら、子どもたちそれぞれの興味関心等に応じて、単元末や選択授業で発展的・探究的に学習を進めていくのが「学習の個性化」。こんな捉え方で実践を進めていくのが取り組みやすかったことを覚えています。

令和の教育には、教師が子どもに応じて道をつくり、道を仕分けしていた「個に応じた指導」というところから、子ども自身が自分に適した道を選んだり、道を自身で切り拓いたりしていく姿「個別最適な学び」にまで高めていくことが求められています。そこにICTの力を使えば、教師の負担を掛けずに進めていくことができるのではないかと論立てされています。実践なき理論は空虚。これからどんな実践を重ねていけるのか楽しみです。

令和3年度 多治見市教育実践論文

今年度の教育実践論文には、新人の部10点、一般の部16点、合計26点の応募をいただきました。校種別では、幼稚園1点、小学校14点、中学校11点でした。ICTを活用した実践が多くみられました。配付されたタブレット端末を教師も児童生徒も積極的に活用しているようすが分かり

ました。また、コロナ禍において、「先生も学びを止めない」ことの大切さが感じられる論文が多くありました。

多治見市の教育の発展に貢献する素晴らしい実践をありがとうございました。

この度の受賞、おめでとうございます。

◎最優秀賞(一般の部) 精華小学校 土松拓生 教諭

【社会】社会科を主体的・対話的に学び続けようとする児童の育成～新しい学力『学び続ける力』の涵養を目指して～

講評:対話的な学びを生み出す指導や自主学習の指導など、主題である「学び続ける児童」を育成するための一貫した実践がなされている。手段としてのICTの活用は汎用性が高く大変参考になる方法である。主体的な学びを続ける力が付いてきたという児童の変容が分かりやすく論述されている。



◎最優秀賞(新人の部) 精華小学校 小川将弥 教諭

【理科】主体的に見方・考え方を働かせて、高まりを実感する理科の授業実践

講評:教科の見方・考え方を働かせた主体的な学びのある授業の創造は、今日的な課題である。継続的に実践できており、児童の具体的な姿がよく分かる。“ロイロノート”の色カードを利用し、対話に目的をもたせる手立ての有効性を示す実践などが具体的に記述してあり、大変参考となるものである。

○優秀賞(一般の部)

精華小学校 大蔦康司 教諭

【算数】一斉指導で力をつける「主体的に高め合う」令和の算数授業～ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を通して～

滝呂小学校 江崎紀子 教諭

【学級経営】集団の中で個が輝き、主体的に学びに向かう力が育つ学級経営の在り方～非認知能力を育む思考過程の共有・可視化と、自己有用感を育む客観的価値付けを通して～

小泉小学校 平賀啓祐 教諭

【体育】よりよい動きを探究していく児童の育成～OODA ループの学習展開におけるICTの活用を通して～

精華小学校 前田賢人 教諭

【外国語】英語を用いて生き生きとコミュニケーション活動に取り組む児童の育成～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

○優秀賞(新人の部)

脇之島小学校 杉原悠里 教諭

【健康安全】コロナ禍でも安心して登校できる学校づくり～持続可能な感染症対策の実践～

南姫中学校 吉村匡生 教諭

【社会】主体的に社会参画する態度を養う社会科学習の在り方～ICT 機器の効果的な活用実践を通して～

小泉小学校 脇田崇史 教諭

【算数】見方・考え方を働かせながら主体的・対話的に課題解決に取り組む児童の育成 ～ICT を活用した授業改善～

明和幼稚園 肥田奈津穂 教諭

【全領域】丈夫な体づくりをめざして～生活・遊び・家庭を結び付け多様な動きを身に付ける～

※上記の方の論文は、論文集に収録されています。

「ICT 機器を活用し、情報活用能力を高め、学びを深める子ども」を目指して

ICT を効果的に活用した授業実践の紹介

多治見市では今年度から一人一台のタブレット端末（iPad）が導入されました。「子どもも教師もまず使ってみる」「1日1時間は授業で活用」というスローガンを掲げ、ICTを活用した授業が、各小・中学校で積極的に実践されました。（下記以外の実践も、『令和4年度多治見市版 ICT 活用ガイドブック for Teachers』に掲載してあります。）

●小学校第5学年：算数「複合図形の求積」

<活用機器・アプリ>

大型モニター

タブレット端末（ロイロノート・スクール）



<活用の場面・方法>

- 単元の第4時において、複合図形の立体の体積を求める場面。ロイロノート・スクールの「送る」の機能を使って、補助線や式、言葉などを書き込めるデジタルカードを取得する。また、分からない子どもはヒントカードを使う。



【ヒントカードに書き込む児童】

<効果>

- 提出機能を使うことで、学習状況を把握できた。
- 子どもの実態に応じたカード（話型やヒントとなる図を段階的に書き込んだもの）を用いることで、算数的な見方・考え方がもてるように促すことができた。また、自分の考えを思考の流れに沿って順を追って話すことができる児童が増えた。
- タブレット端末の画面共有やポインタ機能を併用することで、発表者の説明が見やすくなった。

●中学校第3学年：理科「生命の連続性」

<活用機器・アプリ>

大型モニター

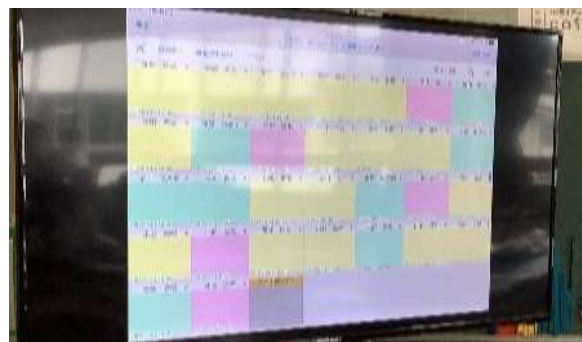
タブレット端末（ロイロノート・スクール）



<活用の場面・方法>

- 実験後に個人追究において自己の考えを構築し、スクランブル交流をする場面。交流する前に、ロイロノート・スクールの「提出箱」機能を用いて、自己の理解度に応じた色のカード（緑・黄・赤）を送る。全

体交流の後に理解が深まった場合は、提出箱に色カードを送り直す。スクランブル交流では理解度の異なる（色の違う）仲間と交流する。



【提出箱に送られた色カード】

- 授業の終末では、ロイロノート・スクールのアンケート機能を使い、「本時の授業の中で、誰の考えで自分の理解を深めることができたのか」について振り返る。本時の学習を振り返り、自己の学習の変容について見つめ直す。



【アンケート結果をもとに学習を振り返る生徒】

<効果>

- アンケート結果など、仲間の考えを共有することで、生徒は、仲間との関わり合いが自他の学習の助けになったことを自覚できた。また、充実感や自己肯定感を高めることができた。

多治見市 ICT 活用目標

令和3年度

前期：子どもも教師も「まず使ってみる」

後期1日1時間は授業で活用

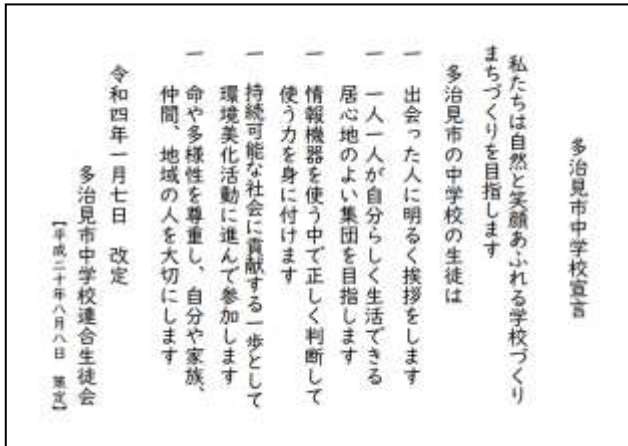
令和4年度

小学校：“すぐにも”どの教科でも “誰でも” 活かせる

中学校：教科の学びを深める

多治見市連合生徒会交流会 令和版「多治見市中学校宣言」完成

令和4年1月7日、第31回連合生徒会交流会で、「令和版多治見市中学校宣言」が完成しました。



【令和版「多治見市中学校宣言」】

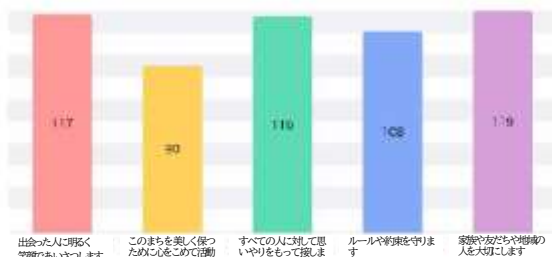
<改定までの歩み>

同宣言は、平成20年8月8日の連合生徒会で策定されたものです。今年度（令和3年）、「令和の時代にあったものへと見直しを図る」ために、『この令和の時代に、中学生として、笑顔あふれる学校づくりまちづくりの観点から、どう振る舞い、またどう行動すべきか』というテーマで、夏の連合生徒会交流会（8月5日）で検討を開始しました（議長校：南ヶ丘中学校）。

8月の連合生徒会交流会の内容を各校に持ち帰り、生徒会役員が中心となり、自校生徒へのアンケートの実施や学級や役員による話し合いなどを実施して、盛り込むべき項目について集約していきました。



【学級における検討会】



【ロイロノート・スクールを活用した全校アンケートの結果】

11月、12月には、『オンライン連合生徒会』を実施し、各校の取組状況について交流し、集約に向けての方法や各校の考えについて学ぶことができました。



【オンライン連合生徒会】

各校の案を基に、議長校（北陵中学校）が原案を作成。令和4年1月7日の連合生徒会で検討され、承認、完成（改定）に至りました。



【1月7日連合生徒会交流会】

<宣言に込めた願い>※紙面の都合により一項目のみ
一人一人が自分らしく生活できる

居心地のよい集団を目指します

「笑顔あふれる学校にするためには、一人一人が安心感を持ち、活躍できる集団づくりが必要だと考えます。自己肯定感を高めることは、いじめを減らすことにもつながります。今の宣言には、そのような内容がないので、今回盛り込みたいと考えました。」

（交流会の発言より）

子どもたち自身が、宣言の一つ一つの項目を学校づくりやまちづくりの観点から検討するなかで、改めて、中学生として今の時代に大切にすべきことは何かということを考えることができました。次年度は、この宣言に基づいて、各校のリーダーたちによる創意工夫のある生徒会活動が展開されることを期待しています。